塀の中の障害者の処遇のありよう

先日の朝日新聞の「獄　『詫び状』が扉を開けた」の記事（2004/3/14）を目に留めた方もいると思う。秘書給与詐欺事件で服役した元国会議員の著書に関係する記事であった。

元議員は、「自らへの戒めと、かつて一票を投じてくれた人々への詫び状として、経験のすべてを記そう」と退所後に「獄窓記」を記し、昨年暮れに出版した。この本が、著者にも思いかけず、「閉ざされがちな世間への扉を押し広げた」と注目されているという。つまり、著者は塀の中での服役先は、刑務所内でもほかの受刑者や見学者の視線にさらされることのない隔離舎房（身体障害、知的障害、精神障害のある受刑者のための施設）で「指導補助」という名での服役仕事であり、その間の様子が本に記された。今まで「だれも語らず、伝えられることのなかった刑務所での障害者の処遇のありよう」が、初めて記されたものとか。

早速、購読した。購読する前は、主に詐欺事件の経緯等に触れられ、障害者の処遇の部分は少ないかなと思っていた。あにはからんや、著者と彼らとの日常の係わりの様子が淡々と詳細に、かつ具体的に、かなりのＰが割かれていた。その記述の一部をここで紹介するのは、躊躇する程の処遇のありようも記されており、また、障害者の服役としての作業内容も、「まさか…」と云いたくなる程のありようも記されている。

こうした今まで聞いたことのない障害者の世間から閉ざされがちな実体を知ると、最近よく耳にする、「障害も個性」、「人権擁護」、「地域で共に生きる」、「みんなちがって　みんないい」等々の言葉の使われ方が、何か底の浅い響きとして聞こえてこざるを得ない。まして、国としての一機関（刑務所）内の処遇の実体だけに、国の障害者への理解度及び対応度が推測されるだけに尚更である。ただ、こうした国の障害者への施策は、取りも直さず、我々社会を構成する一人一人の意識の延長線上の話と考えると、こうした実体から目を逸らしてはならないことだけは、確かなことと思う。もし、時間がお有りでしたら、ご一読ください。

なお、著者はこの体験から、今は知的障害者施設で障害者と日々向かい合い、係わり合う日々のようであり、刑を終えた障害のある方々を受け入れる施設構想を、仲間の方々と語り合っているようである。

（2004 年 03 月 19 日　記）